

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっかい生きてます!



2021

2

巻頭言

MESSAGE from YUTAKA

メッセージフロムゆたか

肥大化しがちな 「自我」を いかに抑えるか？



潮騒 JTC の仲間たちや多くの支援者の皆さんに助けられ、私は今月で78歳となりました。若くして異端の世界に身を沈め、やがてアルコールと覚醒剤に依存して身を持ち崩し、消すに消せない罪深い過去を背負う私ですが、幸運にも還暦(60歳)を基点に生き直しの人生を手に入れました。新たな人生のスタートなので「起点」ではないか？と思われるかもしれませんが、私たちアディクト(依存症者)の回復には終点がないので、その対語としての起点ではないのです。絶えず過去を振り返りながら生きる宿命を負っているのです、あくまで生き直しの基準となる出発点の「基点」という言葉になります。少し理屈っぽく響くかもしれませんが、私なりのこだわりとしてご容赦ください。

そんな私も無我夢中で仲間たちと一緒に回復人生を走り続け、気が付けば古希(70歳)、喜寿(77歳)をクリアして傘寿(80歳)も視野に入りつつあります。世界一の長寿国に住んでいるとはいえ、アル中・ヤク中の長寿三冠？達成も夢ではなくなりました。昔の私を知っている人からすれば、「憎まれっ子世にはばかるだな」と軽口を叩くことでしょう。

これまでも触れたことですが、遅咲きの回復人生を歩む私も、アディクトとしてもう一つの誕生日(クリーンバースデー)を持っています。AAやNA、GA、あるいは回復支援施設につながって、アルコールや薬物、ギャンブルを止めた日を新たな自分の誕生日とし、その日を基点にして誕生年を数えています。これによれば、私はやっと18歳になる少年です。ふつうなら思春期から大人への入り口に差し掛かり、健全に自我が拡大して

人生観や世界観の形成に踏み出す時期ですが、悲しいことに私はこの時期からの社会経験がほとんど空白なのです。それだけに今も自分の大きな宿題として、自我の問題には手を焼く場面があります。ともするとアディクトは自我を肥大化させることに無自覚になりがちです。私も60歳まで、社会の常識とは異なる“ゆがんだ自我”で周囲に迷惑を掛け続けてきた身ですから、コロナ禍での難しい施設運営の舵取りに苦勞する日々であって、ストレスにより仲間たちが“ゆがんだ自我”を全面化させて好き勝手の振舞いをすると、それを抑えようと私もつい肥大化した“ゆがんだ自我”で対抗してしまいます。スポンサーの助言で「これではいけない」と反省することしきりです。その意味で私はまだまだ未熟者です。何しろ18歳ですから…(笑)。

私たちアディクトが時おり頭を持ち上げる驕(おご)りを捨て、肥大化しがちな自我に反省を加えて「謙虚に生きる」人生を保ち続けるには、①転ばぬ先の杖である12ステップを実践し続けること②私たちが信じるハイヤーパワーの計画に身をゆだねること③行き詰ったらスポンサーに相談すること—などを辛抱強く続けるしかありません。曲がりなりにも私がこの原則を保ち続けられていられるのは、やはり仲間たちの回復を信じ、仲間たちの中で生き続けること、つまり仲間たちに自分の命が支えられていることにあるのだと思います。私たちが「自我」を全面に押し出してしまったら、その時点で回復人生の成長はストップしてしまいます。そのことへの自戒を失わずに、引き続きコロナ禍の厳しい施設運営に努力していきます。

(法人理事長 栗原 豊)

コロナ禍における施設運営の 課題と展望

当事者活動の原点見据え

夜回り隊 発足

第2回

周知のように潮騒 JTC の活動は、依存症の問題を抱える仲間たちが共同生活を通してアルコールや薬物、ギャンブルなどからの回復を目指す、ピアカウンセリングによる当事者活動が基本です。「今日一日」を合言葉に、フラットな関係でお互い励まし合い、日々ミーティングを持続してクリーン期間を積み重ねる自助・互助の活動スタイルです。原型は欧米に普及した治療共同体施設ですが、当事者にとってはスリップにつながる「仲間からの孤立」こそが、実は新型コロナウイルス以上に大敵なのです。

このため潮騒 JTC を主導してきた栗原センター長には「回復に差別を設けず、助けを求める人には広く門戸を開いてきた」自負が強くあります。設立以来、「来る者は拒まない」「仲間は家族だ」の原則を貫いていることから、この国の潜在ニーズを反映して年々入寮者が増え続け、施設は大規模化しています。

少子高齢化や核家族化、格差の拡大など社会的な要因を背景に、潮騒 JTC にたどり着く入寮者の多くが高齢者であり、その傾向がますます加速して平均年齢は50代後半になっています。栗原センター自身が60歳で生き直し人生をスタートさせた“遅咲きの回復者”だけに自らの老後ビジョンを重ね合わせ、行き場のない高齢依存症者の受け皿整

備にいち早く取り組んできました。

認知症が進行して施設が提供する回復プログラムに取り組めない高齢依存症者が、老人ホームへの入居を断わられてきた苦い経験から、栗原センター長は潮騒を「終の棲家」として、高齢者介護(デイサービス百寿)事業にも踏み切りました。亡くなっても魂の安寧を願って専用の墓所も自前で整備し、「あの世で仲間と一緒にミーティングができる」(栗原センター長)環境を整えました。

こうした試みを持続するためには当事者スタッフに加え、膨大な事務作業や専門的なケアを担える人材が不可欠となります。今では福祉関係の有資格者を含め30人近くの専門職員を雇用し、現場で奮闘する当事者スタッフと連携しながら日々、忙しく働いています。

高齢入寮者の多くは長年の荒れた生活などから家族と疎遠になり、社会から弾かれてきた複雑な背景を持っているだけに、施設内における人間関係に亀裂が深まる場面が少なくありません。ここにコロナ禍が追い打ちを掛け、多彩なプログラムが実践できる環境が極めて限られています。勢い入寮者は内向化した施設生活を強いられ、ストレスが増大。施設への不満や反発、仲間同士の小競り合い、隠れ飲酒など予期せぬトラブル場面が増え、全体にぎすぎすした空気を感じます。

こうした状況下で当事者スタッフ(回復者カウンセラー)らは日々、仲間が引き起こすトラブル処理に追われています。このため内部の滞留化を防ぐ意味から、14カ所に拡大したナイトケア施設(共同生活宿泊寮)の人的な交流・移動を多くし、夜間に起きやすい入寮者間のトラブルを未然に防ぎ、問題となりそうな芽をいち早くキャッチするために、当事者スタッフらで「夜回り隊」を発足させました。結果、仲間同士のトラブルが減るなど効果が表れています。

依然として課題は、マスク、手洗い、アルコール消毒、三密の回避など日常のコロナ対策の励行を促しながら、各種プログラムが組めない状況下でどうしたら新たな回復の可能性を見いだせるか? ですが、栗原センター長は「この1年間、コロナ禍で難しい施設運営を強いられてきた。見えてきたのは、やはり当事者活動の原点。逆境にあるからこそ、夜回り隊のように先行く仲間が転びそうになる仲間を下支えすることが不可欠になる」と力説しています。(次号に続く)

2021回復物語& 今年の抱負

高校卒業後は 心理士資格を目指して 大学進学へ

アサヒ



アルコールと薬物依存に苦しんでいた自分が、潮騒JTCにつながったのは22歳の時、全てを失って精神科病院に入院したことがきっかけでした。しかし、この時はまだ「底つき」には至らず、入院したものの何度もスリップ（アルコールの再飲酒）を繰り返し、気が付いたら潮騒JTCに居た、という感じです。それほど自分が壊れていました（笑）。

入寮してしばらくは施設が提供するプログラムに比較的、真面目に取り組んでいました。でもクリーン4カ月目で、「バレなけりゃいいや」と高を括ってしまい、スリップの落とし穴にハマってしまいました。アル中の悲しい性で、「1杯だけ」という飲酒欲求に負けてしまいました。気が付くと2杯、3杯…いつの間にか連続飲酒が止まらなくなり、入寮者仲間やスタッフからは全く信用されなくなりました。

そんな中、ある仲間からボロくそに言われた事をきっかけに、その仲間を見返してやろうと思うようになりました。ゆがんだ自我が頭をもたげたのでした。でも、それが自分を奮起させました。「俺は変わってみせるぞ!」と。とりあえず文句を言わずに施設での役割分担をこなし、言われた事だけはしっかりやろうと、それを実行し続けました。仲間の病院送迎、入寮者の相談対応、農業隊への参加、高齢仲間の介護…いろいろとやりました。それらが少しずつ認められると、やりがいや自信につながり、エイサー隊の中心メンバーとしても存在感を得るようになりました。気が付けば、準職員になっていました（笑）。

入寮者のサポートをする日々の中で痛感したの

は、この国では社会のレールから外れてしまうと、もう一度受け入れてもらうことがとても難しいという事です。それでなくても依存症の人たちは、早くからドロップアウトの人生に踏み込んでしまい、高校中退や中卒者のように世間で言う低学歴組が多く、これが社会復帰や就労を困難にしています。手に職もなく、資格も持たないとなれば、なおさらです。貧困の連鎖に陥り、ホームレス生活も珍しくありません。やがて家族とも疎遠になり、孤立し孤独を抱えたい人がいかに多いことか…。

自分は生来、引っ込み思案な性格でコミュニケーション・スキルもそれほど高くありません。でも、彼らの孤独感や疎外感はとても共感、共有できます。次第に自分の中に、そういった人たちの支援をしたいという思いが強くなりました。この熱い思いは、自分を新たな「学び」の場に駆り立てるようになり、支援する側の立場として現在は夜間高校に通い、まもなく卒業です。

31歳の今、夢はさらに広がり、次は通信制大学に進学して公認心理士を目指す事も視野に入ります。この資格が取れば、福祉と医療の両面からの支援が可能だと考えています。まさに自分の依存症者としての経験が生かせるようになります。近い将来、個々に適した支援方法が可能となるよう、専門的な知識と技術をもって、心理に関する支援を必要とする仲間をサポートしていけたら、と考えています。

そうそう、忘れてました。恋人募集中です。詳しくは総務まで（笑）。

社会人として 自立を目標に日々 努力する

テル

あの時の私は生きることも死ぬことも、どうにもならなくなっていた。文字通り「進退窮まれり」の状態だった。いつの間にか酒がやめられなくなり、毎日酔い潰れていた。もはや仕事も出来なくなり、家族への情愛も消え失せ、持てるもの全てを失った。貯金は使い果たし、クレジットカードを使いながら日々なんとか糊口をしのぎ、寝泊りしていた。完全なアルコール依存症だった。

でも、そこまでいっても酒はやめられず、ひたすら飲み続けた。やがてカードも止まり、フラフラな状態で保護され、気が付くと潮騒 JTC に漂着していた。家を出て2カ月くらいだったが、その間の記憶がない。私は28歳だった。

入寮はしたものの肉体も精神もボロボロで、しばらくは体を動かせなかった。自分の無力など認められず、仲間とのミーティングや各種プログラムにも参加せず、ただ毎日を無為にやり過ごした。でも、心のどこかに「このままではいけない」と、奮起を促すもう一人の自分がいた。少しして私は農業隊に参加させてもらうことになった。

青空の下で、仲間と一緒に汗を流す農作業は新鮮だった。何よりも飲まずに体を動かすことが、気持ちよかった。このように楽しみができたから、潮騒での最初の1年はなんとかうまくいった。でも、そこは重い依存症の私である。いつしか「なおっちゃった病」が頭をもたげた。次第に社会や俗世間と離れた施設暮らしに、焦りを覚えるようになっていた。就職を意識するようになり、外での楽しみを考え始めたら結局、酒しか出てこなかった。



こうなると元の木阿弥で、回復からはどんどん遠ざかった。施設にバレないように隠れ飲酒をしながら、いろんなことを考えた。しかし、半ば狂った頭ではどれも妄想と変わらなかった。なにもかも達成できずに入退院を繰り返すようになった。農業隊からは外れ、デイケアに移動になった。仕切り直しで、一からのスタートとなった。

でも、怪我の功名というか、今までとは違う仲間と話したり、外部との交渉事など、これまでとは違う業務の中で少しずつ自分の問題を見つめられるようになった。依存症者を取り巻く周りの人たちの苦悩を知り、思いやりを持てるようになった。すると、これまでの自分の行動に対する反省や後悔が生まれた。

いつしか「(アル中が) 素面(しらふ)でものを考えられるようになることは、それは実現できることにつながる」という栗原センター長の言葉を、自分を取り巻く環境の変化を感じることで、やっと理解できるようになった。「飲まなければ何でもできる」という、今の私の自信につながっている。

今は潮騒アディクション・ビレッジ会館の4階事務所に机を置いてもらい、日々、多種多様な業務をやらせていただいている。自分がしていることが、困っている仲間の手助けになれば幸いだと思う。そして、それが仕事として自分の生活の基盤になれば、最高の結果だ。私の今年の抱負はこのチャンスを逃さず、社会人として自立すること。この目標を達成させるために、自信をもってクリーンを続けているし、日々努力している。繰り返すが、センター長は言っていた。「素面で考えたことは実現する」と。

「るみの家」 めいの 回復(途上)物語

こんな私でも 変われると信じて…

vol.9

1年クリーンも空しく 施設の仲間とのスリップに



“絶対にしてはいけない” 13ステップ

やっとの思いで手にした「奇跡」の1年クリーン。でも、私にとって回復の道のりは1年で安定するような、生易しいものではありませんでした。「もうスリップなんてするもんか」と思っていたのに…、そこからわずか1ヶ月でスベりました。しかも、“絶対にしてはいけない”スリップでした。

私のスリップは、「るみの家」の仲間との13ステップでした。相手は、性同一性障害の疑いがある女性でした。彼女も私同様に問題ばかり起こすので、私自身も絶対に

彼女との13ステップなんてあり得ない、と思っていました。だからルミさんも信用して、私とその仲間を同部屋にしました。ルミさんのことを思うと、それだけはやってはいけなかったのに…。

私も相手の仲間も、これまでに13ステップの苦い経験があり、そんなことをすれば結局、自分だけでなく相手の仲間も傷つけてしまいます。大問題になることは体験的に分かっていたはずなのに…。同じ回復を目指す仲間同士だから、「13ステップは絶対にやってはいけない」ということは常識中の常識でした。しかし、そこは依存症という常識を超える摩訶不思議な世界です。「分かっちゃいるけど、やめられない」のが依存症の怖さなのです。

私のスリップ(13ステップ)は、あくまで現実逃避の手段でした。自分の非を棚に上げた、一時しのぎの疑似恋愛にしかすぎませんでした。そのスリップが分かったとき、ルミさんは私の頭を叩きながら泣いていました。私はもう泣かせないと決めたのに、またしてもルミさんを泣かせてしまいました。私も泣きました。

結果、その仲間は3日後に施設を「脱走」して、そのまま戻って来ませんでした。私はといえば、1年クリーンを迎えても変わっていない自分が本当に情けなく、惨めな日々でした。何度も何度も変わりたいと思うのに変わらない自分が嫌いでした。

ルミさんからの叱責で 心のスリップに

こうして私の回復への取り組みは、またもや振り出しに戻りました。なかなかやる気が起きず、施設内では表面だけ頑張っているふりをしていました。なんだか目標も夢も遠いところ過ぎて、近づけない気がしていました。自分の中でうまく処理できない、もやもや感が募っていった頃、3年付いていた執行猶予期間が終わりました。そうするとますます気持ちがだらけていき、努力もせず、適当にやっていました。

それをルミさんが見逃すはずがありません。けちゃんけちゃんにやつつけられました。「やっぱり私はあんたが嫌い! 我慢してきたから辛くなった。話もしたくない」。そんなことをたくさん言われました。私はへこみ、久しぶりに施設を出て行きたいと思いました。心のスリップでした。

そうして私は、息子との面会のために送り迎えをしてくれた両親に必死に訴えました。「死にたいくらい辛い」「私には愛というものが分からない」と。そうして両親をまた、余計に悩ませてしまいました。(次号につづく)

受刑者 からの手紙

「受刑者の手紙」は本来は公開されることを前提としていない私信ですが、当事者の本音が書かれており、依存症回復の第1歩である「自分に正直になること」を示す手本です。プライバシーに配慮し、掲載させていただいています。

“就労継続支援 B 型”の支援制度を受けたい

新年あけましておめでとうございます。昨年はセンター長やシゲさんからの暖かい、心のこもったお手紙に心が救われました。潮騒 JTC について、まだ分からないことだらけですが、シゲさんの「Yさんは仲間です」という一言で不安が吹っ飛びました。そこで一つお聞きします。私の満期出所日が今年の5月ですが、潮騒にお世話になる、身元引受人として承諾して下さる、という事は、仮釈放で出所できるのでしょうか？ 1カ月ほど仮釈がもらえると風のうわさで聞きました。そうなると、潮騒にお世話になるのが4月中旬あたりになるかと思います。残り3カ月と少し、満期でも残り4カ月半です。恐らくあつという間かと思いますが、その間に、センター長や他スタッフの皆様との文通を通して絆を深められればと思っております。

ところで、私は潮騒が取り組む“就労継続支援 B 型”の支援制度を受けたいと思っています。すぐに受けられるものなのでしょうか？ よければお話をお聞かせいただけないかと思います。どうぞ宜しくお願い致します。これから本格的に寒くなってきます。それだけでなく社会はコロナ禍の問題で大変かと思いますが、お互い頑張って目標に向かってトライし続けましょう。

追伸：センター長から謹賀新年のお便りが届きました。年賀状が届くのはもう10年ぶりなのでとても嬉しく思いました。ご指摘のように“無事故で健康”で1日も早く、潮騒の皆様にお会いできる日を毎日の糧として頑張っていきます。

(群馬県 Yさん)

出所してもダルクや自助グループにつながる

新年あけましておめでとうございます。昨年は大変お世話になりました。笑顔いっぱい、夢いっぱい、いっぱい福がありますように。本年も何卒よろしく願い申し上げます。毎日寒いですが、皆さんいつもと同じく元気よくお過ごしでしょうか。お手紙ありがとうございました。心から感謝しております。当地はとにかく寒いです。雪いっぱい、風が冷たくて、本当に涙がでそうです。私の本面が来て、仮釈をもらえる様になりました。

私は今回の刑務所で様々な改善指導を受けることにしました。ダルクのミーティングにも参加して、どうやって薬物に頼らない生き方が出来る様になるかを学びました。気が付くといつの間にか薬物に対する欲求がなくなりました。たとえ、この中でも回復している自分が楽しくなり、日々の生活にも張りが出て、初めて自分らしい人生が送れると実感できました。本当に良かったと思います。

私は出所してもダルクや自助グループ(NA)につながることにしています。頑張って回復して、これから先も薬物の誘惑に負けないようにしたいです。もちろん思い通りにいかない事、辛い事もたくさんあるかも知れませんが、前を向いて、前へ前へと進みたいです。せっかく一度きりの人生をこういところで無駄にするのはもったいないです。ここから、そしてどこへ行っても、皆様の健康と幸運を祈っています。毎日寒いので、どうかお身体を大事にしてください。

(新潟県 Bさん)

しおさい俳壇

2のお題

節分

選者 桐本石見

特選句

年の豆
身内の鬼も老いにけり

あべ

立春の前日が節分で鬼の目を摩滅する意味から豆撒きをする、平安時代中国から伝わり江戸の頃今の様になったとも。また鬼は外見も恐ろしいが実は人の心でもあり疫病などにも言う。若い頃の悪たれも老いて好々爺になった、俳諧の哀れの句。

特選句

節分や
増えゆくばかり豆の数

チャコ

節分に撒いた豆を拾い歳の数ほど食べると幸福になる謂れがある。しかし子供の頃は良いが歳を重ねると難しい、齢には幸せもあるがこの詠は少しの哀れも思う句です。

特選句

春の灯や
緩むことなき鉄格子

ゆたか

鉄格子と言えば、猛獣の檻や刑務所を想いますが春の灯の艶冶と比べて寒さ冷たさを思し、動物園の檻も動物には刑務所と同じかも知れない。自由と言う幸せをつくづく思う句でもあります。

秀逸句

今月の秀逸句

春間近
いまだに去らぬコロナ鬼

アオ

昨年からのコロナ禍は未だ治まらず世界の恐怖の疫害でもある、コロナ鬼と言うのも頷けるが春と共に摩滅して欲しい鬼で鬼滅のワクチンを望む句。

豆撒きや
投げる事より食べる事

イソオ

子供や若い頃は豆を食べることも楽しく自分の年より多く食べました。また田舎では近所にはばかることなく大声で豆撒きもしたのが懐かしい句でもあります。

懐かしや
子供心に恵方巻

のん

大阪で丸かじり寿司があることからセブンイレブンの担当者が一九八九年頃商品名を恵方巻とし全国的に広めたと言う。その商魂もさることながら私にも大阪は懐かしき句の作者の子の日も偲ぶ句。

豆撒くや
マスク掛けたる鬼どもへ

ヒロ

今年もまだコロナ禍が去らず何処へ行ってもマスク姿で哀しいが鬼もマスクと言うのは面白い俳諧の句。鬼は疫病や地震豪雨などまた人の罪にも言う。

春寒の
寄り添いゆくや下津浜

あべ

春は暖かい日ばかりでなく思いかけず寒い日もあり二人で寄り添えば温かい、若い日の思い出かも。私にも青春の日が懐かしい句。

年の豆
撒きし数だけ福来たれ

みく

節分の豆は沢山撒くので少し欲張りの様もありますが、それ程に幸せを強く願う思いの詠でもあり、また世には幸せばかりでなく苦労や災害など多いのが現実で年を重ねて安寧を願う句でもあります。

佳作

豆撒きに託す幸せ福は内	シゲ	豆撒きを家族でしに日懐かしき	タオ
柁に鯛の頭鬼やらひ	しま	豆撒きに鬼を抜いて福を待つ	ナン
節分に湯葉を供えし鬼子母神	ゆーみん	節分だ昔ながらの福は内	ミニー
コロナ禍の密を避けつつ鬼やらひ	めい	豆撒きや歳係はらずうれしさよ	マサミ
豆撒きの子等の歓声逃げる鬼	れいこ	夢の中我も豆撒き加わりぬ	オノ
初体験かぶりつきたる恵方巻	ひーちゃん	豆撒きに励まし合いぬ仲間かな	タイチ
豆撒いて数多の鬼を追い出しぬ	ブッチ	節分に仲間と食べる豆の数	あきら
節分や今も歳ほど豆を食べ	みっちゃん	あら節分暦の上も明日は春	くま
節分や自分の心も浄めたる	いるか	豆打って逃げたる鬼もまだ死なず	えび
赤鬼の出でし裏声鬼やらひ	スオウ	豆まいて仲間の笑顔福は内	まこ
豆撒きて子の日に戻る楽しけれ	ニモ	豆よりも梅の花にて鬼退治	あっちゃん
豆撒きて春も近いな楽しいな	ニシ	豆撒きだ鬼は外だよ福は内	ツッチ
福来れ今年も待ちて豆を撒く	ちあき	コロナ去れ声を限りに豆を打つ	ゆたか
豆撒きだ拾って食べる歳の数	ショッチ		

俳句へのいざない

第十三回 故郷

故郷と言えば「兎追いしかの山小鮒釣しかの川...」の童謡を思いますが、故郷は山や川の地方のみならず海や島もあり、また東京や大阪の都会も生れ育った所が故郷と思います。ただ都会は移り変わりが早く子供の頃の景色が大きく変わることです、しかしながら何十年後に尋ねて見ると駅の名や町の名などは懐かしい。

私の古郷は世界遺産の石見銀山近くの山奥で小学校は分校場であったし、転校後の学校も統合されて無い。何年か前に帰省して縁者の案内でその分校跡や生家跡を見たが今は山と化してあそこ辺りの竹藪が生家跡と教えられた、また海岸の道を行くと昔在った家も無く蒼い海が広がるばかりで寂しい。それでも子供の頃栄螺や魚を獲った記憶が甦るし、稀に出会う爺さんや婆さんに話掛けると、屋号を問われる、昔の村の名と屋号を伝えるとハイハイ背の高い爺さんの孫さんかと返事され話が弾む。

日本で有数の過疎県の故郷でその原因を思いまた村に残りし者京大阪へ出し者の人生と年日を顧みる。盆正月には故郷を目指す人も多いがこの時期に改めて故郷を思ふのも俳句へのいざないです。

「神楽笛山の更けゆく石見かな」

「吹き溜まる雪も八重垣出雲かな」 など懐かしい。

2月のバースデー



イト

おふくろの所
に行きたい



トシ

早く実家に
帰りたいです



カラ

早く出たい
です



ブー

エンツツ!!



ガッキー

還暦を
過ぎました



モミヤマ

みなさんに
感謝して
います



シノブ

仕事に
復帰したい



ミカ

元気で
やってます



トウ

とうとう
75歳か!



テラ

70歳
ぐらいか?



スガ

69歳?
ほんと??



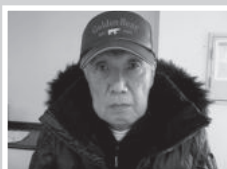
ナルボウ

「がんばるな」
が合言葉



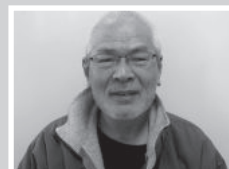
ガー

テキトーに
いきます



カン

クリーンで
がんばってます



ヤス

がんばるぞ!



モモ

早く出たい
です



トチギ

なんとか
ここまで
頑張ってます



イチロウ

...



ノッポ

なんとなく
やらせて
もらってます



ユタポン

まだまだ



ユタカ

100年時代を
どう生きる?
ジョー・バイデン
と同年。

2月の行事

- 2月3日 鹿島神宮豆まき(中止)
- 水戸保護観察所スマーブ(中止)
- 2月18日 潮騒俳句会(予定)
- 2月20日 東京第19回くらしフェスタ立川
センター長 講演(中止)

3月の行事予定

- 3月3日 水戸保護観察所スマーブ(予定)
- 3月11日 潮騒俳句会(予定)
- 3月20日 条件反射制御法研修会(予定)

感染予防対策を徹底して行います。
状況に応じて中止や延期になる場合があります。

栗原さんの作品に 人生の苦悩の旅を思う

茨城町の涸沼湖畔に住む白田美鶴さん(詩人、本
法人の理事)から、示唆に富む便りをいただきました。
やや長めの文章なので潮騒 JTC に関する部分
を抽出して掲載します。

日本の万葉の世界は確かに命が短命で、様々な
病魔にも悩まされていたようでしたが、歌(和歌)文
化が貴族を中心に一般民も盛んで、和歌でのコ
ミュニケーション(特に恋の和歌)は日記や手紙の
文化を高い文学にまでして、その和歌は現在でも
読むことができます。日本だけでなく様々な外国語
にも翻訳されて、日本の和歌や俳句を中心に高い
古典文学として世界的に認知されているようです。

潮騒でも桐本石見先生、栗原さんの指導の下
で、潮騒俳句の作品集が刊行されたわけですが、
最も短いことばによって季節を思い、「実感」を詠む
文学は、誰にもでき、しかも短いからこそ深く難しい
宇宙的文学だと言えらると思います。日常の軽い出
来事から哲学的な宇宙表現まで、幅広く万人が楽
しめるところが魅力です。

2020年12月号の俳句コーナーで心惹かれた句
作が、栗原さんの「百窓に百の苦しみ冬の獄」でし
た。この句は深いイマジネーションがなければ
詠めない作品のように思います。そして「冬の獄」
が季語ですが、冬という厳しさと獄にある人々の
厳しい心境が掛けことばとなっていて、まさにダブル
イメージによる、高い詩の表現だと思いました。

優れた詩は難解ではなく、誰の心にも止まり、そ
して解釈も様々なでき、深みを持っているように思
います。この句を産むために、作者はどれほどの人
生の苦悩の旅をしなければならなかったかをも、
思わずにはられません。(以下略)

ごまめの歯ざしり

潮騒通信はどうあるべきか? 編集担当としては、その事に
腐心しています。コロナ禍で施設内外の行事がほとんどな
くなり、取材ネタが枯渇しているからです。潮騒の動きを伝える
ことはニュースレターの大きな役割ですが、ここまで動きがス
トップしてしまうとお手上げ状態です。でも、考え方を変えま
した。もしかして、これは行事優先の作り方への反省を促す好
機ではないか、と。そうなんです。イメージが貧困なんです
ね。コロナ禍の試練は、潮騒の在り方やここに集い合う仲間た
ちに、「どう生きるのか」を鋭く問い掛けています。閉塞感に満
ち、希望が見えない社会だけど、潮騒とその仲間たちにはアル
コール・薬物・ギャンブル依存症のとりわれからの「回復への
希望」というシンプルなビジョンがあります。鬱々とした日常
で、今にも方向性を見失いつつあるマグマが噴き出しそうな気
配を感じますが、潮騒通信はそのエネルギーをマイナスからブ
ラスの方向に変える一助になれるはずです。なんと大袈裟
な、と笑われるでしょうが、栗原センター長にエネルギーをも
らって新たな試みにチャレンジしていきたいです。(勝)

献金・献品を頂いた方(2月15日現在)

- ・ 土屋 幸枝 様
- ・ 高橋 てる子 様
- ・ 高田 武義 様
- ・ 工藤 克明 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。
おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することが
できておりますことを
ご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、何卒よろしくお願い
申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうござ
いました。
※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただ
いております。どうぞご理解のほどをお願いします。

潮騒通信 どっこい生きてます! 2021年2月号

Contents

P② 巻頭言: MESSAGE from YUTAKA

肥大化しがちな「自我」をいかに抑えるか?

P③ コロナ禍における施設運営の課題と展望 第2回「当事者活動の原点見据え夜回り隊発足」

P④ 2021 今年の抱負 ・ 高校卒業後は心理士資格を目指して大学進学へ アサヒ / 社会人として自立を目標に日々努力する テル

P⑥ 「るみの家」めいの回復(途上)物語 P⑦ 受刑者からの手紙

P⑧ しおさい俳壇 2月のお題「節分」 P⑩ 2月のバースデー / 行事予定 P⑪ ごまめの歯ざしり / 献金・献品 / 目次



■ 編集・発行: 特定非営利活動法人 潮騒ジョブトレーニングセンター
理事長: 栗原 豊

本 部: 〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210 番地 10

事務局: 〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4 丁目 4-5

潮騒アディクションビルレッジ会館 4 階

TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

E-メール siosai2010@yahoo.co.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

潮騒の藁苞(わらつと)づくり

就労継続支援 B 型

潮騒ジョブトレーニングセンターが、行方施設(かすみがうら作業所)で就労支援(就労継続支援 B 型)事業として取り組む、わら納豆用の藁苞(わらつと)の加工作業が本格化しています。コメづくりの際に出る大量の稲ワラを廃棄せず、商品として有効活用する潮騒 JTC の意欲的なプロジェクトです。

1 乾燥



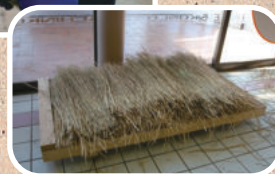
施設の作業所に新たに建てたハウスの中で稲わらを乾燥させます。管理を怠るとすぐにカビが生えてしまうので、気が抜けません。今まで何度も失敗してきましたが、担当するメンバーらが試行錯誤を重ねて品質管理のノウハウを習得しました。



2 脱穀



脱穀機である程度のゴミを落とします。右はきれいになった藁。



3 選別



手作業で藁つとに使える藁を選別していきます。

4 結束



藁の束の太さを均一に揃え、結束の機械で紐で縛ります。太さが規格外だと返品されてしまいます。



5 藁つとのできあがり



納豆藁のできあがりです。わら納豆となって道の駅などで販売されます。「自分が作った藁で納豆ができると、やりがいを感じます」(よっしー)。

